

ブライアン・フリール作『フェイス・ヒーラー』

— 記憶と言葉が作る虚構的現実 —

藤木 和子[※]Brian Friel's *Faith Healer*

— The Fictional Reality of Memories and Words —

Kazuko FUJIKI

Faith Healer is a play consisting of the monologues of three people, revealing the different responses and understandings of shared past events in Wales, Scotland and Ireland. Their monologues show that each person's "reality" depends on how the experience is accepted emotionally, and this causes the differences in memories. This means that what is "reality" for one person is fiction for another. This paper studies how such fictional reality makes man's existence unstable.

Key words: Brian Friel, Irish Drama, Faith Healer

I

ブライアン・フリール (Brian Friel, 1929 ~) 作 *Faith Healer* (1979) は、三人の登場人物が共有する過去をそれぞれの視点を通して語ることで構成されている演劇作品である。故に、舞台上での台詞のやり取りはなく、登場人物の内面の一端を表現する可能性のある身体的動き、顔の表情というものを観客が捉えるチャンスはない。後の *Molly Sweeney* (1994) がそうであったように、観客は登場人物の語りを繋ぎ合わせながら観客自身の心のなかで、舞台上で繰り広げられたであろう状況を再現し、表面的な言葉の奥に潜む登場人物の思いを受けとめていくという作業を託されることになる。言語についての演劇であるとよく言われるこの作品は¹、過去の出来事をそれぞれの視点、観点から述べるという形式ゆえに、登場人物の間では記憶の食い違いが生ずることは避けられず、さらに、同じ出来事に対しても個々の解釈の違いから発言にずれが見られることも多々ある。個々の記憶、或いは、解釈の相違の問題が言葉によって伝えられるものである以上、これは *Faith Healer* や *Molly Sweeney* のような特殊な構成を持っている作品にのみ見られるものではない。しかし、台詞のやり取り、動作を伴う舞台上の表現伝達を持たないこれらの作品では、登場人物が発する言葉に最大の関心が払われるのは当然である。

キーワード：ブライアン・フリール、アイルランド演劇、フェイス・ヒーラー

※ 本学文学部英語英文学科

この作品の登場人物は、タイトルにある「フェイス・ヒーラー」のアイランド人のフランク (Frank)、そして、彼を支える北アイランド出身のグレイス (Grace)、イギリス人のテディ (Teddy) の三人である。語りは、フランク (第一部)、グレイス (第二部)、テディ (第三部)、そして、再びフランク (第四部)、という四つのモノローグから成り立っている。さらに、三人の共有する過去として、ウェールズ、スコットランド、アイランドでの出来事を主としてあげることができる。言葉がどこまで真実を語りうるのか、言葉が個人の内面の思いを正確に表現できるのかという問題はフリールの他の作品にも見られる。また、『ゴドーを待ちながら』の読み方のひとつとして、言葉の伝える事柄と実存の問題が関係付けられるように、言葉は単に強力な伝達手段としてのみではなく、存在の有無をも考えさせるものでもある。本稿ではウェールズのランブルシアン (Llanblethian)、スコットランドのキンロッホバーヴィ (Kinlochbervie)、アイランドのバリーベッグ (Ballybeg) での出来事を三人がどのように自分の過去の真実として記憶し、言葉で表わしているかを比較し、記憶と言葉で作り上げられる一個人の事実は他者からみればフィクション (虚構) にすぎないことが、人間の存在をどのように不安定なものにしているかをみていく。

II

「フェイス・ヒーリング」(faith healing)、或いは「フェイス・キュア」(faith cure) という言葉を辞書で調べると、「医学的治療法というより信仰、祈祷による癒し」²と説明されている。主人公のフランクは信仰療法治療者、祈祷療法治療者という立場にある人物である。第一部で登場する中年のフランクは自らが行なう「フェイス・ヒーリング」については次のように説明している。

A craft without an apprenticeship, a ministry without responsibility, a vocation without a ministry. How did I get involved? As a young man I chanced to flirt with it and it possessed me. No, no, no, no, no—that's rhetoric. No; let's say I did it . . . because I could do it. That's accurate enough. And occasionally it worked — oh, yes, occasionally it *did* work. (p.13)³

修業を必要としない技であり、責任を負わなくてもいい職務、さらに職務とは無縁の天職と受け止めている。若い頃に偶然行なってみると出来た、という彼の信仰治療はたまにしかな成功しないことが早々に語られ、この直後にも10回のうち9回は何も起こらなかった (nine times out of ten nothing at all happened) (p.14) と具体的に確率の低さを示している。そのためか自らの才能に疑問を抱き、自分には超自然の力が備わっているのか、それとも単なるペテン師なのか、という疑問に常に苛まれている。信仰療法と称しながら、その信仰という言葉についても「何への信仰なのか」(But faith in what?) (p.14) と疑問を投げかけており、宗教的意義の欠落に加えて、自らのこの能力の核になるものが分からないことを告白している。さらに、彼のヒーリングは他者に喜びや安堵感を与えることが第一義ではないことが分かるのは、自分の両手を置いて治療している相手が目の前で完治する (watched him become whole in my presence) (p.13) のを見ると、フランク自身も

完全になった (I had become whole in myself, and perfect in myself) (p.13) ことを味わえる数時間の喜びを強調している時である。他人の身体的欠陥を取り除き、健康体に戻せることがフランクに独特の達成感を与えている。ヒーリングが成功すれば信仰療法者としての自らの才能に対する疑問、疑惑はなくなり、成功したときに感じる、完全なる自己 (whole in myself / perfect in myself) という表現を「上流階級の人間」(an aristocrat) と言い換えているのは、このヒーリングを行なうことが上流社会の人間に求められているノブレス・オブリージュ (noblesse oblige)⁴ を果たしていると思ひ込みたいという、彼なりの心情があるようだ。

フランク達一行はイギリス国籍をもつテディとグレイスゆえにイングランドへは行かず、また、アイルランド人であるフランクゆえにアイルランドには赴かないという了解で、主にスコットランドとウェールズを車 (ヴァン) で旅して回っている。テディはフランクやグレイスより少し年長の 50 歳代で、この信仰療法の興行を 20 年以上にわたって面倒をみてきたマネージャーである。その興行は場所代が高価な町は避け、安価で借りることが出来る村の集会所のようなところで行われる。場所が決まると、ポスターを張り、参加者からの料金徴収用のテーブルを配置し、マイクの調子をチェックし、参加者を待つ。参加者は 5、6 人も集まれば上々と言うグレイスの言葉が示すように、非常に小規模で行われる興行である。そしてテーマ曲をかけ、フランクを紹介するのがテディの役割である。慈愛に満ちた瞳で登場するフランクにはあなた方の悩みが分かるのでそれを話す必要はないこと、彼がそれを取り除いてくれるので、彼に任せればいいというテディの紹介の言葉は、フランクには凡人にはない特別な能力が備わっているかのような意味合いを添えている。フランクの信仰療法は彼らの一行が訪れた寂れた村の名前を連呼する形で始まる。しかし、過去の興行場所の村を散文的に紹介しているのではない。この時だけに聞かれるフランクの独特の村の名前の読み上げ方の口調はその村を祝福し、自らを聖別し奉獻しているかのよう (as if he were blessing them [the names of all those dying Welsh villages] or consecrating himself) (p.23) だと見ているグレイスの言葉から、これが何か神聖で畏敬の念を感じさせるような雰囲気作りに寄与していることが伝わる。この不思議な雰囲気の中で身を清めるような祭司の役割を務めるフランクの、過去に訪れた村々への思いを込めるような詩的な連呼は、聖人の名を次々にあげ、神への取次ぎを願うキリスト教の連祷を連想させるものがあり⁵、少人数の参加者に信仰療法治療者としての威厳を感じさせるには十分である。

20 数年のフェイス・ヒーリングの興行において、おそらく一番の成功例と考えられるものがフランクとテディの口から語られている。ウェールズの小さな村ランブルシアンで行ったヒーリングである。フランクは自分の療法が成功裏に終わったことを取り上げている新聞記事の切り抜きを持っており、それを紹介している。

A clipping from the *West Glamorgan Chronicle*. 'A truly remarkable event took place in the old Methodist church in Llanblethian on the night of December 21st last when an itinerant Irish faith healer called Francis Harding . . . cured ten local people of a variety of complaints ranging from blindness to polio. . . .' (p.50)

フランクがこの新聞記事の切り抜きを長年持っている理由は、証拠とか自信のためではなく、身分証明 (an identification) のためと語っているが、このウェスト・グラモーガン・クロニクル紙はフランクの苗字をハーディではなくハーディングと間違えて印刷しており、フランクの考える身分証明になるかどうかは疑わしい。新聞記事は「フェイス・ヒーラー」という職種に違和感を示さず、それぞれ異なる 10 人の病が治ったことを奇跡的出来事として報じているが、その信仰療法治療者が超能力を持っているとは断定していない。

新聞記事という客観的な事実を紹介したフランクに加えて、マネージャーとしてこの興行を見ていたテディはこの時の興行の前後のことも語っている：この日がクリスマスの一週間前であったこと、8 時になっても誰も来ず、フランクとグレイスは喧嘩をし、罵るような言葉の応酬が一時間近く続いたこと、9 時になって新聞記事にあったような 10 人の村人がやって来たこと、寒さとアルコール依存症のため体が震え、顔色も悪いフランクがその 10 人に近づき、治療を施すと、全員が治ったこと、治った全員がフランクに感謝を込めた握手をしたあとで、その中の代表者の思われる年長の農夫がこの村ではフランクの名前は永遠に記憶に留められるであろうと述べ、謝礼にと財布を置いていったこと、その金でフランクとグレイスはこの村の近くの町カーディフのホテルで贅沢三昧をし、四日後にテディのもとに帰ってきたこと。フランクのことは決して忘れないと感謝されたが、ハーディではなくハーディングとして名が残るという、記憶のずれが新聞という文字媒体を通して示される結果になっている。

ウェールズの村での大成功はグレイスの記憶の中ではフランクやテディの記憶のような形で残っているわけでない。第二部でのグレイスの語りが示しているように、彼女の現状はフランクを失い、精神状態が非常に不安定である。忘れられない、一番苦しい思い出 (That most persistent of all memories, that most persistent and most agonizing —) (p.21) という前口上を置きながら、フランクと共に過ごした自らの人生の断片を少しずつではあるが思い出せるものがあると言う。その一つに、カーディフ近郊に住む農夫が不自由な足を治してもらった礼にと置いていった金で四日間の王様のようなホテル暮らしに触れている。足の不自由だった農夫が自分の病の完治に感謝し、大金の入った財布を置いていったこと、カーディフという地名とホテルでの贅沢という断片をつなぎ合わせると、グレイスのこの記憶はテディが絶賛するウェールズのランブルシアン村にある古いメソジスト派の教会での奇跡の日と合致する。しかし、グレイスのこの時の記憶は、10 人全員の完治でフランクにとって大満足の夜というヒーリングに焦点が当てられているわけではない。彼女はあの時は寒い雨の降る夜で、狭い道を興行地に向けて車を走らせていたこと、さらに、フランクはヒーリングの興行を自分の気が向いたときだけ参加する遊び感覚で、「パフォーマンス」と呼んでいたことを思い出す。技能や才能を要する動作を実演する「パフォーマンス」は観客を想定しており、フランクがヒーリング行為を病氣治療のための献身的行為と考えていないことも明らかになる。また、そのヒーリング・パフォーマンス前には、10 人の完治を可能にしたと思われる彼の状況について、「すべてが調和し、何でも可能だと思われるような完璧な技と才能を手中に収めている」(he'd be ... in such complete mastery that everything is harmonized for him, in such mastery that anything is possible) (p.23) フランクの様子をグレイスは語る。その自信と独特の優しい瞳がグレイスには魅力的であった。しかし、そのヒーリングの成功の喜びの記憶より、彼女にとっ

て忘れられない辛い記憶は、あの優しい瞳でヒーリングが始まると、彼女がフランクには在って無き存在になってしまうことである。

And then, for him, I didn't exist. Many, many, many times I didn't exist for him. But before a performance this exclusion—no, it wasn't an exclusion, it was an erasion—this erasion was absolute: he obliterated me. Me who tended him, humoured him, nursed him, sustained him—who debauched myself for him. Yes. That's the most persistent memory. (p.23)

呼ばれて振り向き、顔を 그레이スのほうに向けていても、フランクの視線は遥か遠くを見つめ、目の前にいる 그레이スは無きに等しい。フランクのためにすべてを投げ捨て、常にフランクを支えてきた 그레이スは、ヒーリングに専心しているフランクの眼中にはない。10人の参加者全員が完治したことの喜びより、フランクに自分の存在が完全に無視されることの辛さのほうが 그레이スの記憶の中に鮮烈に刻まれている。

III

ウェールズでの冬の興行に続いて、憔悴している 그레이スの記憶の中に蘇ってきたのはカーディフから遠く離れたスコットランドでのことだった。復活祭のころにスコットランドのグランピアン山脈を歩いたという、初春の山地の散策という清々しい思い出は詳しく語られることなく、スコットランドの北の端に位置するキンロッホバーヴィでの記憶が鮮明に蘇る。キンロッホバーヴィについて 그레이スの語ることは、テディの語るキンロッホバーヴィの記憶と合致する。二人に共通する記憶はフランクのヒーリングに関するものではない。偶然通りかかった海沿いの小さな村キンロッホバーヴィは 그레이スが死産した子どもを埋葬した場所として彼女の心には刻まれている。 그레이スは子どもを車の中で産んだが、死産のため、即座に埋葬した。その墓にフランシスと 그레이ス・ハーディの子どもと書いた白い十字架を立てたのはフランクであったこと、簡単な祈りの言葉を捧げたのもフランクであったことを淡々と語る。

しかし、同じ状況を語るテディの話の内容は少し異なる。キンロッホバーヴィ村の手前2マイルあたりのところで車が故障し、すぐに直す手だてがなかった一行はそこに一週間留まらなければならなかった。出産予定日までまだ3週間あった 그레이スは、立ち往生してしまったこの場所で予定より早く出産してしまったわけである。過去二度の流産を経験している 그레이スにとっては待ちわびた子どもであり、その誕生を楽しみにしている様子はテディの語り口調が伝えている。しかし、予期せぬ車の故障で、医者のある病院へは行けず、車での出産になった時、フランクが 그레이スの傍にいなかったことをテディは非難している。しかも、 그레이スのもとにいないようにと大声でフランクを呼ぶテディの声を無視し、丘を登っていくフランクの非情さを責めている。それはフランクにとってテディも 그레이スも存在していないかのような行動である。フランクを呼び求める 그레이スの声を聞きながら、陣痛に苦しむ 그레이スを励まし、子どもを取り上げる産婆の役割を担ったのはテディである⁶。さらに、死産したのが男の子であったこと、その子のために墓を掘り、埋め、白く塗った十字架にフランシス・ハーディと彼の妻 그레이ス・ハーディの子どもと

書き、慣れない祈りの言葉を即興で唱えたのもテディであった。第三者には記憶の混乱としか考えられないこの矛盾も、その真偽を追求することは意味がなく⁷、これは個々の当事者たちがそのことを心情的にどのように受け止めているかが、その人の事実となることを如実に示す好例である。

キンロッホバーヴィというスコットランドの北端に位置する小さな村からは対岸にルイス島が見えること、そこに 그레이スの死産した乳児が埋められていることは共通する事実であるが、日の当たる石壁にもたれて死産した我が子をしばらく抱きかかえていた 그레이スを記憶しているテディと、滞在した一週間は雨と間違ふような深い霧が立ち込め、視界は不良であったとしか憶えていない 그레이スの記憶の違いも個々の真実がどのように構成されているかを説明している。

그레이スは出産時にフランクがいなかったことをテディのように激しく非難していない。それは言いたいのに言わなかったのか、或いは、我が子のために墓に十字架を立て、祈りを唱えたのはフランクであったと思い込みたかったのかは定かではない。しかし、子どもは死産のため名前がなく、即席の墓標にも「フランシスと 그레이ス・ハーディの子ども」としか書かれていず、埋めた場所も正式な墓地ではなく、簡素な木の十字架が風雨に晒されれば無くなってしまう可能性もあると語る 그레이スは、名前のないことが子どもの存在否定につながることを懸念している。

So there is no record of any kind. And he never talked about it afterwards; never once mentioned it again; and because he didn't, neither did I. So that was it. Over and done with. A finished thing. (p.24)

フランクと 그레이スの間で誕生の記録も、死亡の記録も存在しない我が子のことが話題になることはなかった。亡き子どもの存在を持続させる機会はその子の両親の特権であるはずが、フランクが子どものことを全く話題にしないため、敢えてそのことに触れない 그레이スの姿が語られている。それはパフォーマンス前のフランクが 그레이スの存在を完全に抹消してしまう姿につながり、我が身に加えて子どもの存在さえも消去してしまうフランクの態度に 그레이スは申し立てたい異議を押し殺すのみである。

さらに、 그레이スは名前と存在の関係、そして死産した子どもを妊娠した時の状況を語る。フランクが思いつくまま 그레이スの苗字や出身地を変えて他人に紹介することに触れる。これについてフランク自身は、よく覚えていないし、どの場所も似たような響きで、どうでもいいこと (I don't remember, they all sound so alike, it doesn't matter.) (p.15) と問題視していない。しかし、フランク自身は冒頭で自らの頭文字 FH が「フェイス・ヒーラー」としての運命的な出発点と考えられる可能性を示唆し、名前の意義は分かっている。さらに、20年ぶりに会う父親に自分の名前を告げて息子と認識してもらわなければならない経験もしている。 그레이ス自身は名前も出身地も彼女自身を限定し存在を確実にするもので、名前の不正確さは自己の存在の不安定に結びつくものと捉えている。加えて、彼女の存在を不安定にしているものが、 그레이スのことを愛人 (mistress) と紹介するフランクの態度である。そのことが 그레이スを傷つけると承知していながら、フランクは 그레이スをそう紹介することを止めない。 그레이スはそのような紹介に慣れ、平気でいよう

と試みたが、できなかった。正式に結婚していないため、グレイスもそのことを声高に責めたてることはしない。しかし、駆け落ち同然に家出したグレイスが7年ぶりに故郷の父親のもとに帰ってきたときの彼女は、結婚して7年 (We'd been married seven years. .) (p.26), フランクと自分は結婚した (Frank and I got married.) (p.27) と父親に告げている。これは、単に父親を安心させるためだけではなく、グレイスの意識がそうであることが分かる。死産した子どもの墓標に二人の子ども (Infant Child of Francis and Grace Hardy) と記した記憶は、自分たちが夫婦であることは当然であると考えているグレイスを示しており、墓標の文字について同じ記憶を持つテディも二人が夫婦であると認めている証拠である。しかし、フランクのいないところでグレイスが二人の関係をこのように話していることをフランクは知らない。グレイスが結婚を迫ったことはなく、あの几帳面な性格にも拘らず、結婚は望まず、ただ自分のために一生懸命尽くすことで満足している (She never asked for marriage and for all her tidiness I don't think she wanted marriage—her loyalty was adequate for her.) (p.15) とフランクは理解している。それはグレイスが彼女の願望を口にしなかったからフランクに伝わらなかったのか、フランクがそう思いたいからそれがグレイスの望みであると信じたのかは分からない。

結婚していると考えているグレイスと、結婚という概念を排除しているフランクだが、結婚式のイメージは数回登場している。キンロッホバーヴィで車が故障した時、折れた車軸を修理できる鍛冶屋はいるが、その鍛冶屋は妹の結婚式で付添い人を務めるため家を留守にしていれば車の修理には時間がかかると語るテディの発言の中に結婚式が登場する。また、後にバリーベッグの酒場で出会う若者たちは友人の結婚式に出席し、新郎新婦を新婚旅行に送り出したばかりであった。しかも、その中の一人は転落事故にさえ合わなければ新郎の付添い人に最適の新郎の親友であることが語られ、結婚の証人である付添い人のイメージが先ほどの鍛冶屋に重ねられる。さらに、テディの観察の中でフランクとグレイスが結婚式を想起させるような行動をとっている箇所がある。それは前述のウェールズの村でフランクのヒーリングが大成功に終わった直後のことである。

And then he [Frank] suddenly went crazy with delight. And he threw his arms around me and kissed me on both cheeks. And then he ran down to Gracie and caught her in his arms and lifted her up into the air and danced her up and down the aisle of that old church and the two of them sang at the top of their voices, 'Lovely, never never change', trying to sing and dance and at the same time breaking their sides laughing. And then he flung the door open and they ran outside and sang and danced in the snow. What a pair! Oh my dear, what a pair! Like kids they were. Just like kids. Then I heard the van starting up. By the time I got out they were gone. Just like that. Didn't see them again for four days—what happened was they went off to some posh hotel in Cardiff and lived it up until the wallet was empty. (p.39)

10人全員が完治するという、まさにクリスマス前の奇跡と思えるようなフランクのパフォーマンスのあとは肅々とした雰囲気古いメソジスト派の教会全体に立ち込めていた

はずである。村人が到着する前はフランクとグレイスの互いに語りあう罵倒の声が響き渡り、村人を治し終えたあとの敬意に満ちた静寂のあと三人だけになると、再び教会内は響き渡る大声に包まれる。それは罵倒の声ではなく、成功を称えあう喜びの声である。ここでのフランクとグレイスの様子はまるで結婚式を挙げたばかりの新郎新婦のようである。グレイスを抱き上げるフランク、教会の通路を行き来し、その喜びを周囲にまき散らしているかのような二人、さらに、「今のままで」と大声で歌う二人の声は永遠の愛を誓う言葉のように反響している。祝杯を挙げるために二人だけで車に乗って出かける様子は新婚旅行に旅立つ新婚カップルの行動であり、置き去りにされたテディはこの結婚の立会人であり、付添人であるとも言える。

しかし、グレイスのウェールズの記憶には豪華なホテルで過ごした数日間の言及はあるが、教会の中で子どものようにはしゃいだことへの言及はない。第三部となるテディの語りはフランクの死亡から一年後にグレイスの死を検証しなければならなかったという時間的推移のなかで行われている。そのためか、テディの語るバリーベッグの様子も喧嘩するフランクとグレイスではなく、可能であったはずの仲睦まじい二人の姿が強調されている。グレイスにとって何よりも大切だったのはフランクであることを理解していたテディは、山積みの請求書のことも考えず、多額の謝礼金を四日間という短期間で使い果たしてしまったことに啞然としながらも、あの教会でのパフォーマンスのあと、子どものように幸せを全身で表現し、フランクに寄り添う美しいグレイスの姿を事実として記憶していることが明らかになる。

テディの記憶の中で疑似結婚式を挙げたグレイスはフランクと一緒に7年目に一度父親のもとに帰っている。フランクとの些細な口論がその引き金であった。家畜小屋を改造したような粗末な家で暮らしたり、車に寝泊まりしなければならないフランクとの生活とは違い、北アイルランドにあるグレイスの実家は元裁判官の父親が自慢する豪華な館である。精神病院への入退院を繰り返していた母親に代わってグレイスは家政婦ブライディに育てられたことを語るが、母親の病因については触れていない。7年ぶりに見る父親は藤の椅子に座り、ひざ掛けをしている。卒中のため体が不自由になっていることを窺わせる姿である。その父親もグレイスが名前を名乗ってもすぐに分らず、幼い頃の愛称を聞いてやっと娘であることが分かる。ここでも名前に対するグレイスの不安感がつきまとう。しかし、娘であることは認識してもらえたが、弁護士資格を得た直後にフランクのような男を選んだことが許せない父親からは7年ぶりに会う娘に対して温かい抱擁も歓迎の言葉もない。娘がフランクと出て行ったあと、6か月もすればこそそこそと帰ってくると父から慰められていた母は亡くなっている。母の死はグレイスに責任があると責める父は、6か月という父親からの猶予期間を過ぎ、7年ぶりにこっそり帰ってきた娘を受け入れようとはしない。娘の行動が家名に傷をつけた刑罰を延々と述べる父親は、裁判官の職を辞したとはいえ、グレイスの知っている昔のままの裁判官の姿を呈している。そのような父親を見て、グレイスの帰郷の目的は消えてしまう。彼女は父親に謝りたかった (I'd have a chance to kiss him over and over again and say sorry and tell him how often I thought about him.) (p.27)。父親にはフランクという人物が理解できなくとも、7年間という歳月のあと、娘の心情を受け止めてもらいたかったのである。しかし、目の前にいる父親は我が子を気遣う父親ではなく、被告人に詰め寄る冷徹な裁判官でしかなかった。

その姿の父親に対して悪態を吐きたい衝動を必死に抑えるグレイスは父親との決別を確信する。父親の是とするものすべてを否定し、父親がベテニ師と呼ぶフランクとの落ちぶれた旅回りの生活への献身を再度決意する。そして、翌日にフランクの元に戻ったグレイスは、父親に与えるはずの抱擁と謝罪の言葉をフランクに与えている（And the next night I was back in the Norfolk byre, . . . kissing Frank's face and shoulders and chest and telling him how sorry I was, . . .）（p.28）。父親との別れを決したあとに宿ったのが、あの死産で終わった、名前も付けられないまま土に返さなければならなかった子どもでもある。

スコットランドのキンロッホバーヴィでのフランクの記憶からはグレイスの出産についての語りは全くない。キンロッホバーヴィは第一部ではフランクの母親が心臓発作で重篤である知らせを受けた場所であり、第四部では母の死を知らされた場所として語られている。グレイスの出産に立ち会ったテディは陣痛の苦しみの中でフランクを呼び求めるグレイスを故意に置き去りにしたフランクを人でなしのように責めていた。しかし、夕刻戻ってきたフランクの尋常ではない饒舌ぶりから、フランクがすべてを承知しており、フランクがグレイスの出産のことを敢えて口にしない心情をテディは理解する。フランクにとってのキンロッホバーヴィは愛する人々の死に関わる場所として彼の記憶に痕跡を残すことになる。

IV

ウェールズとスコットランドを巡りながら行ってきたフェイス・ヒーリングの興行をアイルランドで行うことを決めたのは、フランクはテディの発案だと言い、グレイスはフランクが強く希望したものであると言い、ここでも解釈の違い、記憶のずれが生じている。フランクのパフォーマンスが近年成功していないため、飲酒量が増え、興行をすっぽかし、見知らぬ人と喧嘩を始めるフランクをグレイスは見ている。イギリス人よりケルト民族的気質のほうがフェイス・ヒーリングは受け入れられやすいと考えるテディが、ウェールズとスコットランドの村々を網羅したあとはアイルランドしか残っていないと説得するのはマネージャーとしての役割であろう。

フランクは自分のヒーリングが10回に1回しかうまくいかないものであることは自覚しており、上手くいかない時は自分でも分かったと述べていた。それ故、ウェールズでの大成功という極端な例は除外しても、成功、失敗はつきものであることをフランクは承知している。その扱いを見てきたグレイスは彼のもとにやってくる人々が彼にとってどのような存在になっているかを次のように語っている。

. . . the people who came to him — they weren't just sick people who were confused and frightened and wanted to be cured; no, no; to him they were . . . yes, they were real enough, but not real as persons, real as fictions, his fictions, extensions of himself that came into being only because of him And if he cured a man, that man became for him a successful fiction and therefore actually real, and he'd say to me afterwards, 'Quite an interesting character that, wasn't he? I knew that would work.' But if he didn't cure him, the man was forgotten immediately, allowed to dissolve and vanish as if he had never existed. (p.25)

成功した時は「かなり興味深い人物、上手くいくと分かっていた」(Quite an interesting character that, wasn't he? I knew that would work.)と、冷静に振りかえりながら神秘的な療法者としての態度を保ち、反対に失敗した時には相手のことは即座に忘れてしまうことで対処していた。失敗すれば存在しなかった者と見なされ、成功してもフランクゆえに存在するフィクションとしてしか考えていない、という受けとめ方は、自分の受け入れやすい形でのみ受け入れているという姿勢である。

しかしアイルランドに渡ることを決断する1, 2年前のフランクはヒーリングの才能に完全に見放されたかのように失敗が続いていた。それまでのように、その人は存在しなかった人物として削除し、忘れることが出来ず、治せなかった人の住所を突き止め、自分のヒーリングの力を証明しようと何度もその人の家を訪れ、警察沙汰になりかけたこともあった。また、不調のなか久々にヒーリングが成功すると、フランクは自慢すると同時にグレイスを愚弄するような言葉を投げつける。また、失敗すればそれがあたかもグレイスに責任であるかのように悪意に満ちた蔑みの言葉を吐いている。そのいずれもがグレイスと法律を関係づけるものであり、グレイスが弁護士の資格を有していること、彼女の家系が法律関係の職に就く家系であることへの反発、挑戦のように響く。「かなり興味深い人物、上手くいくと分かっていた」という冷静な態度は、「法律家はこれをどう判断しますか。嘘だ、勘違いだ、ですか」(And what does the legal mind make of all that? Just a con, isn't it? Just an illusion, isn't it?) (p.29)と皮肉をこめた態度に変わり、グレイスへの個人的攻撃が増幅していき、フィクションとして処理できる範囲を超え、受け入れられる形を見つけられないフランクの混乱した姿が伝えられている。

しかし、フランク自身にも自分の行なっているヒーリングの源が何であるかが分かっていないことをグレイスは知らない。始めた当初から自分には特別な能力が与えられているのか、それとも自分は単なるペテン師かという問いに悩まされていること、また、自らの才能をどのように定義づけることができるのかと、フランクがその答えを模索し続けていることをグレイスもテディも知らない。ヒーリングが不成功に終わった時は沸々と湧きあがる自らへのこの疑惑を酒の力で抑え込んでいた。しかし、アイルランドへ渡る前年はヒーリングが思うようにいかず、酒量が増えたことは、フランクが「この力は減少しているのか、お前は仮面をつけ始めているのではないか、お前は抜け殻になっているのではないか」(And is the power diminishing? You're beginning to masquerade, aren't you? You're becoming a husk, aren't you.) (p.14)という、自らの能力に対する底知れぬ不安と厳しい問いに苛まれていたことは容易に想像できる。そのような状況での帰郷である。

V

興行での帰郷はこれが初めてであるが、その前には、前述のように父親に会いアイルランドに戻ったグレイスもいるし、母危篤の知らせを受けてダブリンにいる父親のもとに一人で帰ったフランクがいる。しかし、興行場所として選んだのは、グレイスの故郷である北アイルランドの都会でもなければ、フランクの父が晩年を過ごしたアイルランドの首都でもない。三人が行き着いた場所はドネゴール州にある小さな村バリーベッグである。宿として決めたバリーベッグの酒場のラウンジで結婚式帰りの若者との出会いがフランクの運命を決める。この若者たちはヒーリングへの参加者ではないが、ラウンジにいる彼ら

は「結婚式に出席した人々のなかでの残り組」(the remnants of a wedding party) (p.18)とか、「ラウンジの隅に座り、邪魔されたくない様子」(... they were sitting in a corner by themselves and you could tell they wanted to be left alone...) (p.31)と描写され、ウェールズとスコットランドでの寂れた場所で行われたフランクのヒーリングの雰囲気がこのアイルランドの小さな村でも蘇る。

Maybe in a corner a withered sheaf of wheat from a harvest thanksgiving of years ago or a fragment of a Christmas decoration across a window — relicts of abandoned rituals. (p.12)

酒場の隅に陣取る若い農夫たちは、自分たちには無縁の結婚という祝い事を済ませた後の残り物であり、収穫祭のあと隅に集められた枯れた麦の一束のような存在である。そして、よそ者を珍しく思ったこの若者たちからの質問に答えるようにテディが仰々しくフランクを紹介することで、ポスターを張らない、料金徴収用のテーブルのない非公式のフランクのフェイス・ヒーリングが準備されていることが暗示される。

そこにいた若者は四人で、指の曲がったドナルドからは指を治すように挑戦を受け、半身不随の青年マクガヴィは後で連れて来られたとフランクは記憶し、グレイスはフランクのほうでドナルドの指を治せると申しで、最年少のマクガヴィも最初からそこにいと語っている。二人の記憶のずれはあるが、ドナルドの曲がった指は元通りになった。その奇跡的成果に狂喜する様子は「ディオニュソスの夜」、「バッカスの夜」と喩えられ、かつてのウェールズの古い教会での10人の完治者が神聖なる静寂の中でフランクに示した敬意とは対照的な状況である。

加えて対照的なことは、フランクがマクガヴィのためのヒーリングを行う時間である。フランクの興行はポスターにも記されている(The Fantastic Francis Hardy / Faith Healer / One Night Only)ように、一カ所一夜限りの興行である。しかし車椅子のマクガヴィに対峙する時刻は夜明け直後である。車椅子の青年を治せるものは誰もいないことは周知のことで、あの若者たちの凶暴さを酒場の主が警告し、さらにフランク自身でさえもこのヒーリングは失敗に終わると初めから分かっている、フランクは酒に逃げることも、この場から立ち去ることも選ばない。ここでのフランクも以前の不調時のフランクとは異なる。

フランクがグレイスの苗字を正確に憶えず、いろいろの名前で自分を紹介することにグレイスは不満を漏らしていた時、それはフランクが単なる嘘つきではなく、フランクは周りのものを作り替えなければならないという強迫観念のようなものに付きまといわれていると説明を加えていた。

... it was some compulsion he had to adjust, to refashion, to re-create everything around him. ... it seemed to me that he kept remaking people according to some private standard of excellence of his own, and as his standards changed, so did the person. (p.25)

作り替える基準はフランク独自の考えに沿うものである。彼の考える優秀さ、完全さの基準が不変ではないため、彼が何を優秀と考え、どのようなものが完璧なものであるのかという考えが変われば、当然作り替えたいと思う理想的な人物像も変わってくる。フランクが若いころ、自分の目の前で病を抱えている人が治るのを見ると、自分も完全になった気がする」と告白し、完全なる自己 (perfect in myself) という表現を「上流階級の人間」(an aristocrat) と言い換えていたのは、あの当時の彼にとって上流階級の人間が理想的に思っていたことが推察される。かつて、グレイスの父親はフランクがやっていることは騙しの商売 (your career of chicanery) (p.50) だと手紙に書いたことがあった。その後、グレイスは卒中後の父に昔と変わらない貴族的な顔立ち (his patrician face) (p.27) を見ている。手紙を読んだ瞬間は憤慨したフランクだが、「騙し」という語をこれほどの自信を持って使える人物に多少の羨望を持ったことを思い出しているところにも、彼が持っていた上流階級の人間への憧れが暗示される。

グレイスはフランクがすべてのものを自分の考える理想的な姿に変えたがっていると思っている一方で、フランクもグレイスがフランクのことを可能であれば変えたいと思っていた (Would have attempted to reform me. . .) (p.15) とみている。また、グレイス自身も彼女自身の存在を無にするフランクのヒーリングの才能を取り除けるものなら取り除きたい (. . . if by some miracle Frank could have been the same Frank without it [faith healing], I would happily have robbed him of it.) (p.29) という強い思いがあったことも認めている。これらは作り替えたい基準が何であれ、自分の受け入れやすい状況を整えようとしている行動といえる。これは、ウェールズでの成功裏に終わったヒーリングをどのように受け止めたか、また、スコットランドのキンロッホバーヴィという地名にまとり付くものがどういうものであったかが少しずつ違っていることに似ている。いずれも個々の心が受け入れやすいように調整が行われ、それを事実として心の中に収めようとしているのである。前述の、ヒーリングが全く成功しなかった頃の自暴自棄のフランクには、ヒーリングの不成功続きはフィクション的事実であると納得しようとしても出来ず、それを受けとめる場所が見つからないという、心的調整が不可能な状態であったことが確認できる。

フェイス・ヒーラーは全能ではない。いつも寂れた侘しい場所で、卑屈で絶望的な村人数人を相手に興行するフランクは、そのようなみすばらしい環境にいる貧しい人々という条件がヒーリングを成功させるのではないことを確信したため、いつかは王宮に呼ばれて眠り姫を目覚めさせたいものだと思っただけのこともある。しかし、上流階級志向がちらつくと同時に、眠っているようにしか見えない美しい母の亡骸を目の前にした時は、自分に何もできないことを実感している。また、グレイスの母親から神経を病んでいると告白された時は、助けてほしいと言われるのではないかと、心穏やかならぬ無力なフランクがいた。理想像に従って亡き父も作り替え続けてきたと言われるフランクに、父親の虫歯のある口元が父の友人に目撃されたのではないかという思い出が蘇る。警備員から音楽家へと自らの理想像に従って作り替えてきたはずの父親が本来の姿のままで彼の記憶の中に存在していることをフランクは自覚する。

アイルランドへ渡るまでの成功と失敗に満ちた一行の旅を知ると、アイルランドでのフランクに多少の変化が見られることも分かる。それが帰郷したことによる安堵感に起因するものか、そうでないのかは不明である。しかし、バリーベッグの酒場では、フランクは

グレイスのことを初めて妻として紹介し、それまで酒びたりで不機嫌な日々を送ってきたことが信じられないほど、穏やかで陽気な時間を過ごしていることはグレイスとテディが証している。さらに、長年持ち続けていた、あのウェールズでの成功を記した新聞記事を捨てたのもこの酒場である。それは彼が簡単に子どものことについて触れ、子どもは宝物だという趣旨のことを述べた後、その新聞記事が伝える奇跡的療法も、ヒーリングのあとに寄せられる賞賛と感謝も、子どもに比べれば全く価値がないものである (A child would have been something. What is a piece of paper? Or those odd moments of awe, of gratitude, of adoration? Nothing, nothing, nothing.) (p.51) ことを断言し、身分を明らかにするものとして持っていた記事の切り抜きを捨てる。死産の息子について感傷的になるのではなく、息子がいたとすれば自分を超越するフェイス・ヒーラーになれたかもしれないという短い言葉の中に、あとに続いたかもしれない我が子への期待と思いは、キンロッホバーヴィでの悲しみから長い年月を経て、今、フランクの口から語られている。グレイスは子どもの名前が記録されないことで存在がかき消されることを嘆いていた。ここでのフランクは、名前が間違っているとはいえ、文字として記録されている自らの存在証明となる新聞記事を破棄する行動をとり、文字が残す賞賛以上にはるかに価値あるものを確認している姿が明らかになる。

アイルランド行きはフランクが強く希望したものだと語るグレイスの根拠は、フランクが不調のヒーリングの力を故郷で取り戻し、生まれ変わることができるかも知れないと感じ取っているという彼女の見方である。フランクは口が裂けてもそのようなことを自らが言うような性格ではないと言うグレイスが、フランクに代わって帰郷の目的を明らかにしているようであるが、当のフランクは第一部の終わりで次のように言っている。

The first Irish tour! The great homecoming! The new beginning! It was all going to be so fantastic! And there I am, pretending to subscribe to the charade. (*He laughs*) Yes, the restoration of Francis Hardy. (*Laughs again*)

(p.20)

初めての故国での興行は新たな出発であり、自らの再生であると言いながら、フランクはそのような立ち振る舞いに同意するふりをしている私 (And there I am, pretending to subscribe to the charade.), と称している。グレイスの期待するような新たなフランクとしての生まれ変わりを、フランクは意図しているのだろうか。

帰郷 (homecoming) という表現は何度か使われているが、故国の地を踏むことや同郷の人と言葉を交わすことで故郷に帰ったという感情が自動的に誘発されるものではないことをフランクは体験する。ヒーリングの失敗が続いた時、フランクはそれを成功させるために努力したこと (trying) はあるが、上手くいかなかった。ヒーリングは練習の不要な技 (a craft without an apprenticeship) とフランクは捉えていた。そのヒーリングと帰郷感情は似ており、努力で成果が上がるものではなく、個々の中に生まれる、説明不可能な、自然発生的な力に依るものである。故郷に帰ってきたという懐かしい感情は、そう思おうと (I tried to simulate it) (p.18) してみても、自らに言いかけ (I told my self that I was indeed experiencing a homecoming. . .) (p.18) 努力をしても持てるものではなかった。

初めての故国でのヒーリング、初めての朝日の中で行おうことになるヒーリングは、前夜の酒神ディオニュソスの混沌とした状況とは違い、すべてが光の中で輝いて見える。太陽神アポロが放つ光の中では、余分な外形は光の中に吸収され、核のみ残されているような不思議な感覚にとらわれ、形ある世界は単なる想像で、自分と対峙している五人の若者も有形の肉体を捨て、霊的部分でのみ、しかも必要としているときのみ存在するものだという暗示に心奪われるフランクの姿がある。

そのようなフランクが、待っているマクガヴィと彼の友人たちのところへ行く。

And as I moved across that yard towards them and offered myself to them, then for the first time I had a simple and genuine sense of homecoming. Then for the first time there was no atrophying terror; and the maddening questions were silent. (p.55)

マクガヴィに会いに行くフランクは寂れた村々の名前を連呼するような以前のヒーリングの形をとるのではなく、コートのボタンをかけ、帽子を脱いで、敬意ある態度を保ちながら彼に近づいていく。帰郷以前に経験した、あの才能に完全に見放された (he seemed to have lost touch with his gift) (p.30)「終わり」がなければ、彼の言う「新たな出発」、も「再生」も不可能である。

理想的姿が変化するため、作り替えたいと思う人物像も変化する。古い仮面を取り外し、空洞化 (husk) している内面をうめるため、今のフランクには新たな理想的姿が垣間見えているのかもしれない。しかし、それは大きな範疇で言えば、今まで同様、自分に受け入れやすいものとして形を変えているだけに過ぎない。その新たな理想が彼に出発点であり核となる故郷にいるという満足感を与え、さらに、自らのヒーリング力について常に彼の心を蝕み続けてきた数々の疑問を消滅させている。ひざ掛けをし、籐の椅子に座っていた貴族的顔立ちのグレイスの父を一瞬思い出させる車椅子のマクガヴィへのヒーリングについては、車椅子から解放するという身体的有形のヒーリングが彼の目指すものではなかったかもしれない。しかし、ドナルドと同じ成功を期待した仲間の四人が、中庭にあった四つの農具を使って彼を死に至らしめたことは容易に想像できる。自らが信じた真実を証拠づける新聞記事を捨て、別の価値に気づき、それを新たな真実として受け入れようとしている理想像は有形のものを超えて、霊的な、精神的なものへと移行しており、その詳細を語る得る証人はもはやいない。また、仮にフランクが存命であったとしても、形を超えたものへの憧れを、形ある言葉で正確に伝えることが出来るかどうかというおおいなる疑問が残る。

VI

この作品を、アーティストとその才能への隠喩として捉え⁸、芸術に関わる者は時に自らの命も芸術に捧げることもありうるという読み方もよく取り上げられてきた。グレイスが亡き夫の職業を尋ねられた時に、アーティストであると答えたことから、フランクにアーティストの面を見ることができ、法律家の考える事実にも挑むように芸術家の事実を突きつけようとするフランクの姿も印象的に映る。この作品の後に出版される *Give Me*

Your Answer, Do! (1997) でも、作家の苦悩が描かれている。単色の作風のみが一人の作家を決めるものではなく、執筆活動が続ける間にはどのように作風が変化するかは未定で、最終的に完成した作品集を待たなければ作家の全体像は語りえず、作家の生存中には作品の評価は不可能であることに加えて、作家には不確定要素は必要であるという言葉さえ発せられている⁹。*Give Me Your Answer, Do!*において、全体はさまざまな異なるもので構成され、相互が補い合いながらひとつの形を作り上げていくものであることが強調されるのは、*Faith Healer* でのフランクの運命があまりにも答えを早急に求めすぎた (Give me your answer, do.) 結果であるとも考えられる。

アーティストについては、テディが興行経験から、アーティストとマネージャーは異なる役割を担い、互いに補い合いながらひとつの興行が遂行されることを述べている。自らのヒーリングの才能について考えを巡らすフランクは、テディの考える一流のアーティストではないと言い、マネージャーとしての域を出ないようにという信条の重要性を力説する。それにも拘らず、長年二人に心情的に関わることになったテディが、あの興行のポスターのデザインをし、 그레이スの死後、彼女のアパート前に捨てられていたポスターを拾い、取り戻している。フランクの死を目撃し、 그레이スの死を検証し、ただ一人残るテディは、フランクと 그레이スを仲の良かった夫婦として記憶に留めることでもこの話の全体をまとめる役割を担っている。

アーティストとしての作家が言葉で自らのフィクションの世界を構成する一方で、文字で書きとめられた事実を放棄し、新たに手に入れたフェイス・ヒーラーの、他人にはフィクションとしか映らない真実を伝承する手段は、フランクの存在が消えると同時に消滅している。出発点である故国に戻り、自分を取り戻したフランクの新たな出発がどのようなものか具体的にはテディには分からない。 그레이スの遺体確認のために警察が用意した車 (ヴァン) が、三人の長年の旅回りをテディに思い起こさせる。現実的になり、現在に生きなければならないと自らに言い聞かせながらも、二人を失ったテディのフィクション的事実は彼の心の中で繰り返される。辛い経験を忘れ、心地よいものだけを記憶するだろうと語っていたガレス青年同様に¹⁰、受け入れ可能なもののみを真実として受け入れ、仲睦まじい二人の姿を心に焼き付けようとしているテディがいる。その一方で、最後のパーティーで自分に向けられたフランクの視線、結局はフランクのフィクションとしてしか生きられなかった美しい 그레이スに見とれる自分の心を見透かしたようなフランクの視線、テディの悩みを知り、その苦しみから解放しようと語るようなフランクの視線の意味を考えるテディには、フィクションで作られられた真実から答を引き出すことは不可能である。この状況はフランクと 그레이スがそうであったように、個々の持つ真実の不確定さ、さらに不安的な人間の存在さえも暗示していると言える。

注

¹ Richard Kearney, *Transitions: Narratives in Modern Irish Culture* (Manchester: Manchester University Press, 1988), pp.125-127.

² 'healing achieved by religious belief and prayer, rather than medical treatment' (*The New Oxford American Dictionary*, 2nd ed. / *Oxford Dictionary of English*),

‘a method of treating a sick person through the power of belief and prayer’ (*Oxford Advanced Learner’s Dictionary*, 7th ed.)

³ Brian Friel, *Faith Healer* (Oldcastle, County Meath: The Gallery Press), p.13.

Faith Healer からの引用はすべてこれに拠る。

⁴ *Living Quarters* (by Brian Friel) においても、この考えは提示されている。

⁵ Richard Pine, *Diviner: the Art of Brian Friel* (Dublin: The University College Dublin Press, 1999), p.146.

⁶ Anthony Roche, *Brian Friel: Theatre and Politics* (Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan, 2012), p.160.

⁷ F. C. McGrath, *Brian Friel’s (Post) Colonial Drama: Language, Illusion, and Politics* (New York: Syracuse University Press, 2004), p.168.

⁸ Roche, 158.

⁹ Brian Friel, *Give Me Your Answer, Do!* (Oldcastle, County Meath: The Gallery Press, 1997), p.79.

¹⁰ Brian Friel, *Philadelphia, Here I Come!* (London: Faber and Faber Ltd., 1989), p.79.